ること。

(三)如上の幹部及び委員は、第五回萬國史學會及びその他相當の史學團體からの提案を研究すべし

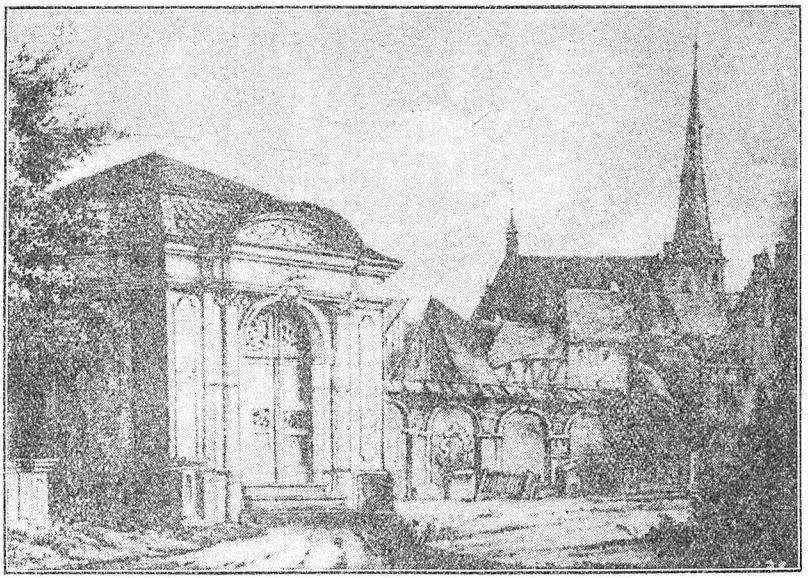
(四)如上の幹部及び委員に於て代表されたる各國は各自唯だ一票の投票權を有するのみ、

要するにこの學會はその標榜するが如く世界各國史學者の國際的共働の實現の第一歩であつた。かくの如きは大戰後世界平和國際主義の氣運に釀成せられたものであらう。しかし前世紀に於て世界の史學の進歩に多大の貢献をなし、この世紀に入つても大なる活躍を續けた獨逸史學者が、この催しに參加しなかつたことは、その理由如何はともあれ、甚だ遺憾なことゝいはなければならぬ。吾々は來る一九二八年の史學會において、かゝる憾みの再び繰りかへされないことを切に祈るものである。

聖ヤーコフ寺及び其墓域

文學士　雪山俊夫

ワイマールの歴史を溯つて最古の地域を探ぐると聖ヤーコフ寺の境内に達する。今日ではワイマール順禮者又は遊覽者の注意を喚起すること甚だ薄いけれども、あの一見田舍の小都會に見るやうな小規模の素朴な寺院と其墓域とはドイツの文化首都の發祥地であつた。此寺の開基に就ては寺の建築の南西壁にある Lucas Cranach の像を刻した墓標の上約四乃至五米突に嵌めてある石の上の文書と、寺の内部に在る祭壇に向つて左の柱に鏤めた石の上の小文書とに刻されてあるが、地上からは



第一圖　聖ヤーコフ寺

讀み苦しいのと內外二個を接合しなければ全文をなさぬので、大公文庫に藏められてある Jonas Gleinerus 氏の複寫に據つて調べると『此寺は主の誕生紀元千百六十八年に使徒聖ヤーコフに捧げられた』といふ文句で起して、聖壇に奉祀されてある聖ペトルス・聖パウルス以下多數の聖者や殉教者の名が刻されてゐる。之によつて此寺院の建立されたのは、紀元千百六十八年であつたことに就ては、疑を挾むの餘地がないのである。其以前に此地に寺塔が存在したといふ說は、皇帝オットー二世がワイマールで紀元九百七十五年に國會を開いたことゝ、當時既にチューリンゲンで發達してゐた基督教が寺院を持つてゐたに相違ないといふ推定と、其當時のワイマールでは彼の地が最も高い地點であつて寺塔の建設に相適はしかつたことから臆測されるのみで、憑據とするに足る文獻を見ないのである。此寺院開基後間もなく紀元千

百七十四年に州伯ルードヰッヒ三世に依つてワイマールは包圍されたが、破壞の厄は免れた。國立文庫の文書の中に、

Wechterswinkel の尼僧監督コンラート、尼僧院主ユッター及び僧院集會一同は、マインツ大僧正領の同派の舊市下ワイマール、ヤーコフ寺の背後にある三個の庭園を、上ワイマールの尼僧等に賣つたことと、それに關するあらゆる權利から撤退したことを承認する。

といふのがあつて、其日附は千二百七十八年六月とある。之に據つて當時既に此寺の存在する地域は舊市に屬したことがわかる。

年代記の著者 Schneider 氏のチューリンゲン史料集錄に、ヤーコフ寺の南方に新しく庭園や家屋が建設されると共に、此寺院を中心とする一角を舊市と呼び、市壁の外に置かれるやうになつたとあるが、丁度國立文庫の文書と相符合してゐる。

此寺院の創建者且保護者は Gleisberg と Vargu'a の騎士であつた。グライスベルグはチュリンゲンの古い家系の貴族で、エルフルト、ゴーター及びワイマールの領地以外にグライスベルグ城及び其隣接の村落とザール河畔のコンディッを所有してゐた。コンディッ城の殘墟はクニッッ城の名によつて今日知られてゐる。次にファルグーラも同樣にチューリンゲンの舊系の一貴族で、最初ランゲン、ザルツァに近いファルグーラに住し、千二百三十二年にタウテンブルグ城を築いて自ら「タウテンベルグの亭主」と稱してゐた。創建者に屬するヤーコフ寺の保護權を兩貴族は十三世紀まで共同に行使してゐたが、其後保護權は數次移動してゐる。千二百四十九年にはグライスベルグ家と姻戚關係を有するハキンリッヒ・フオン・チーフルトが此權利の一部を繼ぎ、又此年にはイスセルシュテットの貴族も等しく保護者に立つたが、銀貨十四馬克で此權利を上ワイマールの尼僧達に讓つた

斯の如き經緯に關してシュナイデルは左の如く明晰に書いてゐる。

聖ヤーコフ寺の保護權は當初グライスベルグとファルグーラとイスセルシュテットの三家に屬してゐた。グライスベルグとファルグーラの兩家は此寺院を建立し寺院の所在地をも寄附したので、寺院の保護權は當然彼等に屬したのである。併しイスセルシュテット家もイエナに程遠からぬイスセルシュテットに其居城を有ち帝國の直屬であつたので十三世紀の初葉にはヤーコフ寺の保護權の幾分を有してゐた此權利が如何してイスセルシュテット家の手に移つたかに就いては、報告が全然缺けてゐるので信憑すべき何物をも書くことが出來ない。或はグライスベルグ家若くはファルグーラ家の姻戚關係に依て此權利に到達したかも知れない併し此權利の爲十三世紀の中葉に、其理由は明白でないが上ワイマールの尼僧院と爭議が生じた。さうして此爭議はイスセルシュテット家が有した聖ヤーコフ寺の保護權を上ワイマールの尼僧達に全然委讓して、其代りに十四馬克を受領したことによつて千二百四十九年に解決を見た。

第二圖　ルーカス・クラナツハの墓標

此爭議の解決に關しては、

マインツの大僧正クリスチヤンは、マインツ管區、チステルチエンオルデン附屬、ワイマール尼僧院の監督、院主、集會に對してワイマールの寺院の保護權を確認する。久しき爭議の後、イスセルシユテットのハ井ンリツヒ・ルードルフ及びベルトルトは彼等に此權利を委讓する。

とあつて其下に大僧正の署名と日附――千二百五十年一月十二日（dat. Erfordie II idus Jan. pontnostri a. primo）としてある文書が國立文庫に今日尚殘つてゐる。

次いで千二百八十六年グライスベルグ家は保護權をチーフルトへ讓つた。此事實に關しては、

グライスベルグのハ井ンリツヒとソルターとはワイマール舊市ヤーコフ寺の保護權を彼等の義弟チーフルトのハ井ンリツヒ及び彼等の妹なる其夫人ベルヒテの爲に放棄した事を承認する。

として、日附を千二百八十六年九月二十九日（dat milles CCLXXXVI ind. IIIIX.（XIV.）III Kal.

とした文書があり、又次の二通の文書

ファルグーラの騎士ワルターは、其先代の住せる屋敷ワイマール舊市ヤーコフ寺の建築されてある廣場及び上記寺院の保護權を、夫人ユツテ及び息ヘルマン及びワルテルの同意を經て、ワイマール銀貨六馬克で上ワイマールの尼僧院へ賣却した事を承認する。但し一定期間賣買契約を取り戻すの權利を保留す。

日附、千二百九十三年七月三日。

ハ井ンリツヒ・フオン・チーフルトは其夫人ベルヒテ及び其息ハ井ンリツヒの合意により、下記を上ワイマールの尼僧集會に讓與することを承認する。

一、夫人ベルヒテの兄ハ井ンリツヒ・フオン・グライスベルグ及びワルテルより得たる舊市ワイマールの聖ヤーコフ寺の保護權の一部、

二、ヘルマン・グチルディスの所有したイリングスドルフの一フーフエの田地。

日附、千二百九十四年十一月二十三日。

によつて、千二百九十三年にファルグーラ家は此寺院の保護權と其周圍の空地と墓地と二三の屋敷とをワイマール銀貨六馬克で賣却し、クライスベルグ家からチーフルト家へ移つた保護權をハキンリッヒ・フォン・チーフルトが委讓したので千二百九十四年には遂に此寺院の保護權は全部僧院集會に歸したことが明白である。次いで此の保護權は千五百二十五年のワイマール宗教改革まで僧院集會に所屬してゐたが、此年僧院は廢棄されたのである。

シュナイデル氏は『此寺の所有物の中に、以前には聖ヤーコフ寺の北側、今日(十八世紀)の所謂神の畠(今のフェオドラハイムの背後)のある所に存在したといふ牧師住宅、屋敷、庭及び穀倉がある』と記載してゐるが、此牧師住宅については記錄が欠けてゐる。千五百二十五年から三十年までの收入の記錄には記されてゐるが、千五百六十九年のヲルフのワイマール地圖には最早それが記載されてゐない。恐らく千五百三十年後に取り崩されたものであらう。千五百三十年にワイマール市會の要請に依つて選擧侯ヨーハンは、市立寺院聖ペトルス・パウルスの維持費を聖ヤーコフ寺の收入から流用した。併し前者の救助が益急を告げ、ヤーコフ寺の維持は迚ても困難になつたので千五百三十五年には全ヤーコフ寺を閉鎖して穀倉とした。牧師住宅を破壞したのは此時であつたかも知れない。斯くて聖ヤーコフ寺は其後四十四年間閉鎖されて了つた。それはシュマルカルトの戰爭やミュールベルグの戰役(千五百四十七年)の爲に寺を顧るの遑がなかつた爲であらう。千五百七十九年、(閉鎖四十四年後)、大公ヨハン・キルヘルムの未亡人ドロテア・スザンナに依つて此寺院は修補されたけれども、祈禱や說教は行はれずに、唯だ葬祭のみ行はれた。全十七世紀中唯だ一度其處で

祈禱の行はれたことがあつた。それは千六百四十年にデンシテート住民が彼等の說敎師フックスと共に瑞典の將軍バーネルから逃れてワイマールの壁內に庇護を求めた時であつた。經理總長クローマイエルの命令に依りヤーコフ寺は彼等住民の祈禱の爲に開放され五旬祭の神事が行はれたのである。

此寺の建築そのものに關しては、其後千六百六十三年と千六百九十六年とに補修されたけれども到底支え難くなつたので、千七百十二年大公ヰルヘルム・エルンストは之を取り崩して、初めにイエナのミュッツエルに、後にワイマールの棟梁アードルフ・リヒテルに命じて新堂宇の工事に着手せしめ、千七百十三年に竣工した。今日の建築はそれである。同年十月三十日大公の誕生日は新寺堂の中で奉祝され、十一月六日には初めて日曜日の祈禱が開かれ、經理總長ライニッに依りて獻堂祭

が催された。此獻堂祭と共に、大公に依つて新に建設された孤兒院の開院式も行はれた。市博物館で觀た此獻堂祭を紀念する爲に新に鑄造された貨幣には、

太陽には光明なき能はず
信仰には德化伴はざるはなし

と銘してあつた。

斯くて新に牧師フリードリッヒ・ロートマーレルの任命あり、久しく中絕された祈禱は秩序正しく開始された。唯だそれ以外の敎區的施設は未だ一定の敎區を此寺が有たなかつたので行はれなかつた。且つ信者に敬虔の思慕を喚る寺鐘が缺けてゐた。『併し何事にも缺けたるを欲せぬ祝福されたる大公は千七百十三年新鐘三個を鑄造せしめ、降誕祭の前日ヤーコフ寺の塔にも懸けたので新しい鐘の音が聞かれるやうになつた』とシュナイデルは書いてゐる。

次いで千七百十四年ヤーコフ寺は教區寺院に高められた。千七百二十一年には大公に依つて風琴（オルゲル）が寄贈され、之が彈奏者としてシモン・アルトといふ人が命ぜられた。次代の大公エルンスト・アウグストは千七百二十八年此寺を衞戍寺院（ガルニゾンキルヘ）として軍隊の爲に祈禱を此寺で行ふことにした。エルンスト・アウグスト大公の後繼者コンスタンチン及び大公夫人アンナ・アマリヤは屢々此寺院に參拜した。千七百六十七年アンナ・アマリヤに依つて堂宇の内部は修飾され、千七百七十四年に更に擴張された。此年大公の居城炎上して其境内に在つたシユロスキルへも災厄に罹つたので、此寺院の檀越はヤーコフ寺へ移され、爾來ヤーコフ寺は衞戍寺院であると同時に大公家の寺院（ホーフキルヘ）となつた。かくて千七百十四年に市會に委ねられた此寺の保護權は千七百七十八年以來大公へ移されて今日に及んでゐる。

此寺院が其建立以來經過した最も困難な時代は千八百六年から十三年までであつた。那翁戰爭の大暴風雨はドイツ國内をも襲うた。ワイマールも之が厄を免ること出來なかつた。ワイマール市に取つての危期は普軍のイエナ敗衂の日（千八百六年十月十四日から十七日まで）の後であつた。普軍の退却に次いで佛命の步騎砲兵及び輜重兵が入り亂れて市内を横行して掠奪を擅にした。佛兵がフラウエンプラーンのゲーテの住宅へ闖入したのも此當時のことであつた。無數の病兵や負傷兵が何等の手當をも受けずに街路に放棄されたので、納屋も馬小屋も人家もそれが收容に充てられ、ヤーコフ寺は數時間のうちに野戰病院と化した。信心深い讃美歌の代りに病兵の呻吟と瀕死者の悲鳴とが堂外へ洩れ聞えた。戰塵漸く飛散して市内に平和と秩序とが入り來つた後に於ても、ヤーコフ寺は尙久しく放棄された病兵等の避難所であつた

併しそれも一時の現象であつたが、殘るものは獨り荒廢であつた。十年以上も斯うした荒廢狀態が續いた。營繕費盡きて荒廢の儘閉鎖されること數年に及び、甚だ慘憺たる光景を呈した。後僅少の料金で堂宇が貸附され倉庫として使用された。さうして斯る狀態は千八百十六年まで續いたのである。

千八百十七年六月大公カール・アウグストは遂にヤーコフ寺の根本的改修を命令した。改修工事は建築家ヘス氏に委ねられ、其費用五千六百二十七ターレルに達したが、其大部分――五千百二十五ターレル――は大公自ら之を負擔し、殘餘は個人の醵金に仰いだ。

其後寺鐘の改鑄、殮房の設置、調度藏の改造等を見、次いで千八百八十三年ルーテルの四百年祭を機會として內部に美術的修飾を加へ、殿堂として稍や完成するやうになつたが、それ等の凡てはゲーテの友にして文藝の愛好者たる大公カール・アウグスト及びカール・アレキサレダーに負うてゐるのである。

次に聖ヤーコフ寺の壁間に見る紀念標や墓標と墓域を一周して逢着する紀念碑や墓碑に就いて少しく記述して見たい。

以上ヤーコフ寺が文化首都發祥の地點であるといふところから、此小寺院の隆替に關する歷史的小考察を試みたのであるが、文學的遺跡を探ぐるものゝ感興をより多くそゝるものは、堂宇や寺塔よりも餘り廣くもなく寂びれて見える其墓域である。其處にはゲーテ夫人の墓所もあり、ゲーテが自分の子供のやうに鍾愛したオイフロジューネの墓碑もあり、シルレルの葬られたのも矢張り此墓域の一角に於てゞあつた筈である。此墓域も堂宇と共に那翁軍の闖入の結果、久しく荒蕪の狀態を呈してゐたが、それを千八百五十八年に修理した

のは大公夫人マリヤ・バウローナであつて、千八百八十八年ゲーテ夫人とオイフロジューネの墳墓を荒蕪の裡から發見して今日あらしめたのは、市會議員ドクトル・カール・クーンであつた。千八百十八年以後は此塋域は埋葬地としては使用されなくなつて、自ら此等の庭園のやうになつたのである。

朗らかに冴えた鐘の音に誘はれ乍ら、私の初めて此寺の塋域を踏むだのは、千九百二十一年八月二十八日であつた。寺の境内に嬉遊する小童等に訊いて、それがヤーコフ寺であることを確めて、寺塔を左に手入れの屆かない芝生の間を縫うて走る小徑を辿ると、先づ眼に着くものは古代型の兜を戴いた小方尖碑（オベリスク）であつた。

カール・ヰルヘルム・グラーフ・フオン・シュメタウ普國陸軍中將、千七百四十二年四月十二日に生れ、アウエルシュタットで受けた負傷の爲に千八百六年十月十八日ワイマールで英雄的の死を遂げた。

と四行に書かれ、其左右に短い弔詩が刻されてあつた。那翁戰爭に倒れた普國の軍人の記念碑は、私には何等の關心事ではないので足早に歩を進めると此記念碑と街路との間に小綺麗な鐵柵で圍まれて地上に横へられた大きな大理石の墓碑がある——墓碑や墓標とを仰いで、少くとも眞正面に見ることに馴された日本人なる私の眼には異樣に映ぜざるを得なかつた。何人のものであらうかと柵の間隙から覗ふと、

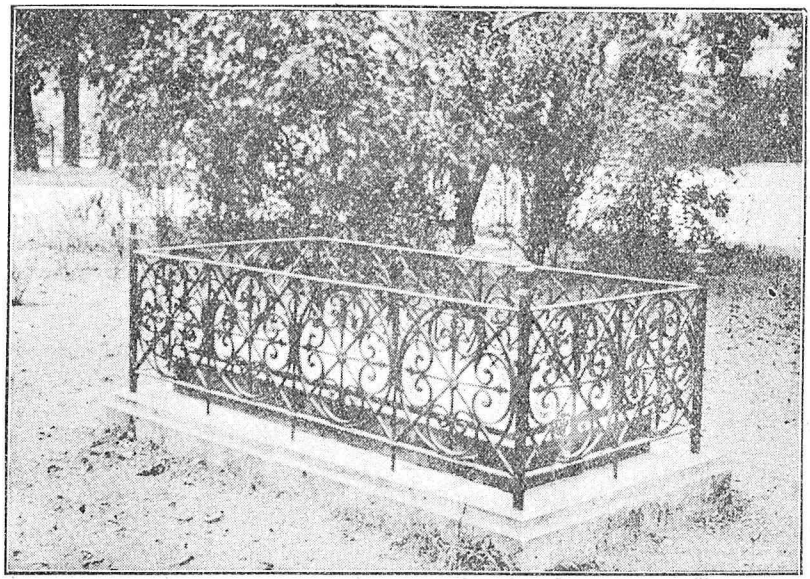
此處に永眠す

クリスチアーネ・フオン・ゲーテ

フルピウス氏の出

一七六四——一八一六

と、簡素に、鮮やかに讀まれるのであつた。さうして何人のやさしい芳志であらうか、花は萎れて



第三圖　ゲーテ夫人の墓碑

居たけれども花環が一個捧げられてあつた。ヤーコフ寺の鐘は最う鳴り止んだけれども、ヘルデルの御寺の朝勤行の鐘はなほ殷々として耳朶を打つのであつた。八月二十八日――それは丁度ゲーテの誕生日である。

クリスチャーネ・フォン・ゲーテ――此名に依つて直に日本人なる私に意識されるのは、近代的歐羅巴の婦人ではなくて、寧ろ日本の婦人に近い性情である、常に謙虚自遜の態度と其姑なるゲーテの母に似通うた快活さとを以て、ゲーテを慰めむことに献身した醇家庭的の婦人である。彼女は確に世界の婦人の中で最も祝福された一人であるが一面に於てまた甚た憐むべき婦人であつた。稀世の天才ゲーテの夫人であるといふことは、甚だ幸福なる運命であらねばならぬ。さうしてそれは單に論理的に推論される幸福なる運命ではなく、彼女は實に文豪の愛情を一身に終始集めてゐたので

あつた。其幸福なる運命が如何して彼女を憐むべき婦人となし得たであらうか。

ゲーテ夫人及び夫人とゲーテとの結婚については、夫人在世の當時から今日に至るまで屢獨逸人の間に論議され、詩人の唯一可能の家庭的賢夫人として彼女の婦德を讃へるものもあるが、彼女故にゲーテは教養高き同資格(エーベンビュルチヒ)の夫人を迎へて詩人にふさはしい家庭を作ること出來なかつたと言つてゲーテの爲に彼女との結婚を惜しむものが少くはないのである。特に彼女の在世中は口さがない小都會の環境から、彼女は絶えず嫉妬、輕侮、中傷で包圍されてゐた。これが私をして憐むべき婦人と敢て呼ばしめる所以である。近く千九百十六年に、ゲーテ・シルレル文庫に在勤すること二十年ゲーテ文献に精通するグレーフが『ゲーテと其夫人との文通』を夫人歿後百年の紀念の爲に出版した時、雜誌『藝術及藝術家』の發行者で知名の藝術批評家であるカール・シェフレルのやうな人が、此擧を批難して『斯る書冊の公刊は好奇心の外何ものをも滿足せしめない』とグレーフを『死屍に依つて自らを養はむとする文壇の鴉』と惡罵して市井の傳說的蜚語に裏書してゐる。斯る不謹愼はゲーテ研究の昨今を理解せざるものゝ無知と不見識とを曝露するもので、却て文豪に對する冒瀆であるやうに考へられる。獨逸の生むだ最も偉大なる天才の結婚生活は默殺すべき性質のものではあるまい。史實はあらゆる批判の基礎であるべきであらう。さうしてゲーテ及其夫人の書翰は此問題に關する最も確實なる史實の一を提供するものでなければならぬ。

ゲーテは嘗て『個人の私的生活を倫理の法庭に引き出す』ことを難んじ、『さういふ美はしい一般人間的の要求は自己に對して向けるがよい。それに就いて缺けた點は神と自己の心とに愬へて矯正

すべきである』と言つたが、それは彼の自家辯護ではなく人間としての彼の優にやさしい道德觀と大なる人格の寬容性とを示すものである。ゲーテの結婚生活に關する史實は寧ろ傳習と形式とに囚はれ、階級的思想に惑溺する社會の流弊とやむに止まれぬ一般人間性の弱處と天才の超越性とを示唆するやうに思はれる。

クリスチャーネ・フルピウスがゲーテと相知つたのは詩人が伊太利より歸つて間もない頃であつた（ゲーテは千七百八十八年六月十八日にワイマールに戻つた）。七月のさる朝、彼女は公園を散策するゲーテに、舍兄なる小說家の爲に地位に關する哀願書を手交したのであつた。彼女は夙に母を失ひ、千七百八十六年に父が亡くなつたので、伯母の許で造花の業に從事してパンの資を求めてゐた。伯母と妹と共にゲーテ家（今日のゲーテ博物館）へ引取られ、千七百八十九年十二月ゲーテの

爲に長子アウグストを擧げ、靄々たる家庭の主婦となつた。ゲーテは所謂『良心の結婚（ゲキツセンスエーエ）』で滿足したので、敎會に於ける結婚の式は千八百六年イエナ戰の後、佛兵がゲーテ家へ闖入せる際、彼女が身を挺してゲーテの危急を救つた後に於て行はれた內助の功を積むこと二十有八年、千八百十六年六月六日に夫人は長逝したのである。

ゲーテのクリスチアーネに對する戀愛は官能的である。ゲーテは多年の戀人シャロッテ・フオン・シュタインのやうな才色兼備の身分ある婦人を捨てゝ結婚するの意思もなく卑賤にして無敎養なる乙女を其邸宅へ引き入れてゐる。怨すべからざる不德である、放縱である。敕任官（クハイムラート）ゲーテの、詩人ゲーテの家庭的幸福を破壞する市民の娘クリスチャーネの驚く可き無作法と無敎養!!　彼女の怖るべき飲酒癖よ舞踏狂よといふのが、ゲーテの結婚に關するワイマール城內の侍女室（ハーレム）から巷頭に連な

る非難と中傷との聲であつた。

申すまでもなくゲーテの伊太利旅行は詩人としての彼の復活であり、內部からの彼の改造であり彼の世界觀の立替であつた。伊太利を見ざる十年餘の彼のワイマール生活はグンドルフの所謂『自己制約』であり『訓練』であり、『認識』であつた。理想を夢みる若さを殘した時代であつた。大公の廷臣としても宰相としても未だ十分に其經綸を事功に試めすを得なかつたのであつた。自己の開鑿又は天才の自由なる發揚はそれが爲に損はれてゐた。彼が哲學的思索的の人間であるか、或は實際的の人間であつたならば、ワイマール的教養で安んずることが出來たであらうが、彼と當代の獨逸人乃至獨逸の詩人とを區別せしめる眼標は、彼が塑像家的造形美術家的であつた點である。彼は內部の强い感激に應じ大なる印象を具象化せむとする本能を持つてゐた。彼に要するものは彼の力にふさはしき大なる印象を與ふる客觀であつた。伊太利に於ける古代及ルネッサンスの藝術、伊太利の自然伊太利の生活はそれを彼に遺憾なく提供した（彼の伊太利紀行は今日の吾々には餘りに驚嘆のみを以て充されてゐる）。彼の官能性は豐滿となつた。彼の觀照力は透徹した。彼は地に敬虔なる古典的官能性と自由なる道德觀との所有者としてワイマールへ歸つた。かくて歸來の彼には凡てが彼の意識に明晰となつた。戀愛の神祕性もなくなつた。さうして夙にスピノザ哲學の陶冶を經由した彼には、肉體ともつかず精神ともつかない過程的中間的狀態に低迷することは最早不可能となつた。今や彼は精神を肉體の背後や側面や上空に求めない。彼には肉體そのものが神性的精神的のものとなつたのである。故に具象を具象として觀照し、そして之を把握することが彼の滿足であり狂喜であつた。限られたるものゝ內に活きた永久の

力を感得して之を享樂せむとする精神の現實性を彼は體驗してゐたのである。

斯うした時にゲーテは自然の一斷片のやうに天眞な、技巧を用ゐない天才の塑像のやうな、アデーレ・ショーペンハウエル（哲學者の妹で母と共にワイマールにあつた）の所謂『女性的ディオニゾス』なるクリスチャーネを見出した。

『形相裕かな伊太利から予は醜い獨逸へ歸つて晴やかな天を陰森なそれと取り換へた。友人は私を慰めて再び予を引き寄せてくれる代りに予を絶望させた』とは彼の當時の感想である。今日日本で歐羅巴を見るよりも更に高く評價されてゐた文化の伊太利から歸つて、狹いワイマールの貴族的因習に浸つた彼の環境に順應せねばならない彼には、『何人も予が言語を解してはくれない』との嘆があつた。一面に不惑の齡を迎へむとする彼には、『予の過重なる此世の仕事を最もよく果し得られるやうな狀態に予を支持することを任とする家庭的婦人を娶ることが、恐らく最も策の得たるものであらう』と妹に與へた手紙に書いたニーチェと共鳴したものがあつたであらう。否、彼は實に一層明白に『キセーニエン』の中に、

萬事に餘り生帳面に過ぎることのない、が同時にどうしたら一番私に氣持がよいかを理解するやうな、さうした婦人が私に望ましい。

と告白してゐる。

斯うした時にゲーテは纖手パンの資を得るべく餘儀なくされ、矜誇もなく要求もなく唯だ彼を敬仰する市民の娘クリスチアーネを見出した。

ゲーテが多年友人として又戀人として交際した叡智と教養との典型のやうに呼ばれた、貴族的色彩に裕かなアポロン型の社交的女官（ホーフダーメ）シャロッテ・フォン・シュタインは四十六歳、素朴で眞率な市民の娘、ディオニゾス型の家庭的處女クリスチアー

ネ・フルピウスは二十四歳、空靈なるものから面を背けた人間ゲーテは當時三十九歳であつた。斯る三角關係はゲーテを待たずして自らゲーテの歸結に到達すべきであらう。

クリスチアーネの父ヨハン・フリードリッヒ・フルピウスは後零落はしたけれども、大公文庫の公吏として教養ある中産階級の人であつた。兄クリスチャンは『リナルドー・リナルディニー』其他の作者であつた。彼女も時代相應の教育を受けてゐたことは明白である。今日の歐羅巴諸國に於て尙往々にして見受けられるやうに、當時のワイマールに於ては、不完全なる佛蘭西語の知識が女流の教養の左券のやうに考へられ、階級思想の盛んなる貴族的雰圍氣にありては、官女にあらざる市民の娘は品位無きものとして其に齒されなかつたのである。メリッタの爲に戀人ファオンを奪はれた女詩人サホーのやうなシャロッテ・フオン・シュタインの當時の精神狀態、ゲーテと融和した後に於て尙且『ディドー』を書いてゲーテを揶揄した彼女の心事を併せ考へると、彼女の怨嗟が他の官女を通して市民の間に波紋を起す時、如何なる誤解と中傷とがゲーテ夫人に對して釀されたかゞ理解され、シルレル夫人のゲーテ夫人に對する反感の據るところも自ら明かになるのである。

夫人の三十年に近き結婚生活の眞相はグレーフの書に依つて略盡されてゐる。收められた書翰は六百一通、ゲーテのものは三百五十四通、夫人のものは二百四十七通、それが今日まで發見された文通の全部である。ゲーテの書翰には筆記させたものも澤山あるが、それは夫人に對する愛の冷却を意味するものではない。手紙を筆記させることはゲーテに於て夙に習慣となつてゐた。『予は自分の手で書く時ほど注意の放慢を感ずることはない筆は思惟のやうに早く走らない。往々予は第一の

文字を書き了らないうちに次の文字の最後の綴字を書いてゐることがある』と言つた。これは何人も常に經驗するところであらう。又夫人の手紙に屢見受けられる綴字の誤謬を指摘して無教養だと難ずるものがあるけれども、それは其人の無知を裏切るものである。大公夫人アンナ・アマリヤやゲーテの母やシャロッテの手紙にも綴字の誤謬は見受けられる。シャロッテの手紙には三格と四格との混同を見當ることがある。これはゲーテの母の言つた通りに『それは學校の先生の故である』かも知れない。さうしてゲーテ夫人の手紙にはそれ等の小瑕瑾を償うて餘りある純眞なる感情の流露が人を動かすのである。

ゲーテと夫人との間に交換された手紙によれば苟も家政といふ範疇に屬する仕事は、經濟から洗濯や洒掃應對や食事や子供の養育や地下室と菜園の整頓に至るまで悉く夫人の擔當するところであつた。さうして家事に大なる興味を以て沒頭する醇家庭的夫人の面目が躍如として現はれてゐる。『昨日は早朝から晩の九時まで窓帷(フォアヘンゲ)に火慰斗をかけました。今日は地下室と什器との爲に防寒の設備をいたします』『月曜日は洗濯して燥かして置きました，今日は火熨斗をかけます。火熨斗は赤くなつてゐます。最う手紙を書いてゐる時間はありませぬ。良人樣』といつたやうな手紙が散見するゲーテは『家の中では萬事私の滿足し得られるやうによく整つてゐる。御身の精神が家の中を駈け廻つて全てを整頓して行くやうだ』と喜んでゐる結婚二箇年の後ゲーテは『神々よ、私はどうして爾等に感謝してよからう。爾等は人間の求むるすべてを私に與へた』と言つたが、母がゲーテに與へた手紙の『御身は神に謝するがいゝ、あんな可愛い立派な純潔な神の創造物は稀にしか見當らない。御身については私は今すつかり安心した』と

いふ言葉と符節を合したやうである。

ゲーテは夫人と同棲して後、或は再び伊太利に或は瑞西に或は佛蘭西に或はシュレージエンに或はベーメンに向つて、久しきは數箇月短きは數週間の旅行を試みたが、其間に往復された手紙は特に情緒の纏綿を極めた文字に充ちてゐる『東のはてから西のはてまで歩るいて見ても』彼には『家に在る方が一番樂しい』ので『究竟御身を愛し御身と共に生きるより、よりよい何物をも見ない』のである。『私が幸福であると、それを特に御身の爲に喜び、何か心地よきものを見ると、私かに御身と一緒であつたならばと思ふ』だの、『さて私は今少し私自らの手で附加して御身に傳へねばならぬ。それは私は御身を、御身ばかりを眞實に、心から切に愛してゐるといふこと、御身の私に對する愛情が何時も變らないといふこと以上に切に希求される何物をも持たないといふことである。御身と一緒でなければ私の旅行は將來何にもなるまい。といふのは私は今すでに御身の所へ歸つてゐたと思ふ。私の朝食を御身の手から受取りたいからである』だの、『再び私の思ふところを全然打明けて話し盡す爲に、御身と再會せむことを喜ぶ』といつたやうな文字が少くない。併し一面には又夫人の手紙に、ゲーテ留守中に於ける環境よりの迫害を訴へる文字が見受けられる。斯る哀訴に接する時にゲーテは、『ワイマールの人々が御身に淸福を許さないなら、それを御身に對して損はむと試みるなら、それは私達の逃れることの出來ない俗世の常態だと考へなさい。そんな事には頓着しない方がよい。それはまた何等意義あることではない私の作物を貶斥することを仕事のやうにしてゐる痴人が今日如何に澤山ゐるかも知れないが、私はそれには注意せずに仕事を續けて行くのだ』といふ風に慰めてゐる。

唯私に心痛ましく感ぜられるのは、此結婚の爲に彼の友人や當代の學者シルレル、キルヘルム・フオン・フムボルト、アルニム、キルヘルム・フオン・フムボルト等、就中ミルレのやうな親友がそれを承認してゐ乍ら不快を感じてそれに觸るゝことを避けるやうな態度を取つたことゝ、ゲーテがそれに慊焉たらず感じつゝそれを默して談らなかつたこと、換言すれば兩者の爽快を缺いだ氣まずい精神的機微である。(ゲーテの作物中夫人との結婚生活に關する以上の兩方面を最も直接に表現したのは『羅馬哀歌』と『哀歌アミンタス』であらう。此二つの作には當時のゲーテの心持が能く現れてゐる)

舞踏狂、飲酒癖、或は詩人の家庭的快樂を破壞した闖入者であるといふやうな夫人に對する、萬犬をして實を傳へしめる一犬の虛吠の如き流言は一顧を値せぬけれども、ゲーテは果して結婚の意思を有してゐただらうか、何故に所謂『良心の結婚』に甘んじて教會の式を怠つたかといふ二つの問題は考察を値する。ゲーテが結婚の意思を有したことは、既に千八百八十九年十二月長子アウグストの命名式を司つたものはヘルデルであり、大公カール・アウグストに乞うて教父に立つてもらつたことに依つても明かである。又千七百九十年に或る友人に結婚を勸めて『貴方自らは何故結婚しないのですか』と訊かれた時、ゲーテは『私は結婚してゐます、式を擧げないだけです』と嚴肅に答へてゐるし、千八百六年のヤーコフ寺の擧式後にも『彼女は常に私の妻であつた』と述べてゐる『一般報知』にベチゲル某に依つて『ゲーテは戰爭の砲彈の響の下に、多年の家政管理者フルピウス孃と結婚の式を擧げた。かくて幾千の砲彈が空しく落下してゐる間に、彼女は命中彈を引いた』といふ諷刺的記事を讀んだ時、ゲーテは『予は予の

家庭の事情が新聞の記事に値するほど豪らい人間ではない。何かさうした事柄が登載されるやうになつた場合には、祖國は予の取る行動を眞劍に解するの責任を有つてゐると思ふ。予は眞面目なる生活を營むで來たし今日もなほ營んでゐる』とコッタに書き送つて憤慨してゐる。

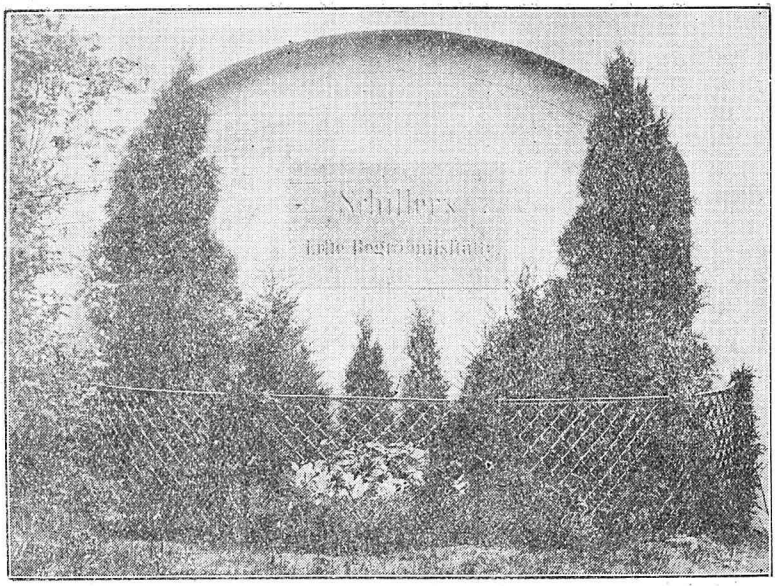
擧式荏苒の理由として私に考へ得られるのは、先づ第一には彼のワイマールに於ける社會的地位と、愛妻をして氣辛い思をさせまじとの思ひ遣りである。伯母の家に寄寓しゐたクリスチアーネを直に大公の貴族的社交場裡へ導くことは彼には不可能に考へられたであらう。次に思ひ合されるのは當時の社會、特に貴族的階級に於ては結婚の觀念は比較的弛緩され、嚴格なる道義的精神が頽廢してゐたので、擧式の延引にはゲーテも當初は餘り留意してはゐなかつたものゝやうであつたことである。あの嚴格なヘルデルがダールベルグ男及其愛妾と馬車を共にして伊太利を漫遊して自ら怪まなかつたことや、敬虔なるハーマンが父を看護したアンナ・レギーナと共同生活を營むでも何等の問題を惹起さなかつたことを見ると思半ばに過ぐるものがある。當時ワイマール市民の一般的常識は、ゲーテは久しからずして『卑賤なる彼女』を放逐することを期待したので、ゲーテの夫人に對する愛着を異樣に考へたのである。故に當時の巷說は彼女に多く排斥の鋒を向けるやうになつた。最後に思料されるのは、形式のみに拘泥せる當時の基督教會に對するゲーテの强き反感である。彼の精練されたる神觀及世界觀は當時の正教派の偏狹なる教義とは相容れなかつたし、迷信と僞善と信仰の惑溺とに對しては彼は烈しく憎惡してゐた彼には良心の結婚は意義を與へるけれども教會の儀禮は末節にも當らなかつたのであらう。

之を要するに、ゲーテ夫人とゲーテとの結婚を

通して吾々は、人間愛と人間苦との纏綿せる純眞なる人間生活の體驗を眺めるのである。人間愛は地に卽し、現實に卽し、人間苦をして裏附けしめる。人間苦なるが故に地上の人としての環境から其環境との交渉から生ずる煩惱對煩惱の苦しみから離脫することが出來ない。苦樂相まつはる微妙なる人生の眞面目――それをゲーテと其夫人とは吾々の爲に垂示したのである。

ゲーテ夫人の墓碑を東へ三米突ばかり行くと、やはり芝生の間に淸らかな鐵柵に圍まれて、石造の寢棺がある。其縱側面にはオイフロジューネと刻されてゐる。ゲーテの哀歌『オイフロジューネ』に依つて永久に傳へられる可憐の女優クリステルノイマンが其處に眠つてゐるのである。父クリスチャン・ノイマンが彼女を拉してワイマールへ來たのは彼女の六歲の時（一七八四）であつた。彼女は直に大公夫人アンナ・アマリヤの愛寵を受けた

『イフィゲニー』と『魚釣る女』の演技に依つて名を知られた才媛コロナ・シュレーデルに依つて劇界へ導き入れられた。後俳優ベッケルに嫁いだが不幸肺を病むで芳紀十九歲で易簀した。千七百九十七年十月瑞西旅行中のゲーテに彼女の訃が傳へられると、『彼女を愛せる人々には彼女の爲に涙あるべく、詩人には韻律あるべし』と悼み『幾多の意味に於て私は彼女を鍾愛してゐた。舞臺のことに働いて見ようとの私の枯死した興味が往々復活したのは彼女を眼中に持つてゐたからだ』とベチゲルに書いてゐるが、彼は彼女を父として敎師として又友として愛して彼女の才能に培つてゐたのである。彼女はエミリヤ・ガロッチー、オッフエリヤ、『群盜』のアマリヤ、『エダモント』のクレールヒェン、『ドン・カーロス』の王妃エボリー、『キング・ジョン』のアーサー等の役に於て當時稀なる演技振を示して、ワイマールの人氣を一身に集めてゐた



第四圖　シルレル最初の埋葬地

オイフロジューネと彼女の呼ばれるのは、ゲーテは歌劇『ペーテルメンヒェン』のオイフロジューネに扮する彼女を最後に見たので、彼女の爲の弔詩にも女神オイフロジューネの名を冠したに始まる

オイフロジューネの墓から二十米突ばかり東して其處に白堊の壁に『シルレル最初の埋葬地』と金泥で書かれてゐる。前日ゲーテ・シルレル文庫の階上で詩人の原稿や手紙や文書を陳列棚の中に讀みあさつた折に、當時の新聞の斷片に僅々八行ばかりで書かれたシルレル埋葬の記事があるのを見た。其中にシルレルは千八百五年五月九日に病死して、十一日の深夜にヤーコフ寺の金庫(カッセンゲヴェルベ)の地下窖で葬られたとあつた。其地下窖は千八百四十七年に取り拂はれて今は痕跡を留めないが、金庫の地下窖で葬られるとは甚だ理解し難い現象である。少しく其由緣を探つて見よう。

金庫とは州金庫(ラントカッセ)の謂で其處で會計の事務が取扱

はれた。州金庫の地下窖は十八世紀の初葉大公會計課長クリストーフ・エニヘンといふ男の建造したものであつた。此男收稅吏としては才幹を有つてゐたので大公キルヘルム・エルンストの信用を得てゐたが、苛斂、强慾、吝嗇の酷吏として市民の憤懣を買つてゐた。大公が千七百六年にエッテルスブルグの別墅を造營し、千七百十二年にヤーコフ寺を再建し、其他學校や孤兒院の建設を企てたりした間に、彼は私に巨萬の財を拵へて地下窖に隱蔽してゐるなどの惡評が傳へられてゐた。事實此地下窖もヤーコフ寺再建中部下の名に於て私に設けられたのであつた。其後舊惡露顯して彼は八千グルデンの追徵に坐して免職となつた。追徵金の擔保として諸種の所有物が押收された中に彼の部下の收稅吏ルカス・シュミットと其妻君とが地下窖の所有權の代償として入れた四千グルデンの借用證書があつた。此男は其內に義務を履行せずに死んだので地下窖は法律上エンヘンの手に歸した後彼も亦た死んだけれども、彼の子孫は追徵金に對する擔保を取り戻すことを肯せず、地下窖の所有權を斷念したので、大公金庫の所有に歸した。それは千七百四十二年の事であつた。此頃になつてヤーコフ寺の塔下に在る貴族專用の地下墓窖は狹隘を告げ、其管理者ワーグネル某が久しくそれを訴へてゐたから、州金庫の地下窖を之が補充として使用することになつて、千八百二十六年の閉鎖期までそれに充てられてゐた。

シルレルの當時には、此州金庫の地下窖は家族附屬の墓地を有しない社會に功績ある上流人士の遺骸の爲めに遺族の嘆願に依つて無償で使用を許されてゐた。シルレルの埋葬の爲にも此憐むべき特權が行使されたのである。

久しく肺患に煩はされてゐたシルレルは、千八百五年の二月初旬にまた發熱したが、三月中旬以

來快方に赴いたので、其圓熟した才能を最後の悲劇『デメートリウス』の完成に傾瀉することに努めた。腹案は既に成つて詩作は着々進捗するので自ら悅び自ら慰めて、四月下旬には大公の御屋敷への招待に應ずる程元氣づいた。五月一日、未だ自己の病氣から全快しないゲーテが、親しく友の起居をたづねて友の新作について談らむが爲に彼を訪問した時、シルレルは觀劇に出かけようとしてゐた所なので、玄關先で別れた。これが兩文豪の最後の會見となつた。觀劇の途中シルレルは稍や異狀を感じたが何事もなかつた。其若き友フォッスが彼を家へ送らうと思つて其棧敷へ行くと、烈しい熱に冒されてゐた。それから歸宅して病狀が險惡になつた。七日には小康があつて夫人の令妹に悲劇の題材に就いて談り、『それではね、誰も私を最う理解してくれるものはないし、私自ら最う自分の言ふ事がわからないのだから、私はむしろやめることにしよう』と言つて不安靜なる睡眠狀態に陷り、デーメトリウスを夢中に談つた。八日に再び小康があつて、愛兒を呼んだりした。夕刻には『益快くなる益はつきりする』と言つたりして窓帷を揚げさせた。九日の朝醫師は浴みをさせたり、シャンパンを侑めたりしたが、次第に無意識狀態に陷つて夫人の顏をも識別することが出來なくなつた。二三度天を仰いで『審判』(ユーデックス)と嬉しげに呵いた。午後四時頃には發音が不明晰となつた。斯くて夫人に手を握られ乍ら五時過ぎに永き眠に入つたのである。大公夫人は旅行中であつた。ゲーテは病臥してゐたが、病氣の險惡化せむことを恐れて何人も彼に友の死を談らなかつた。超えて十一日ワイマールの慣例に從つてシルレルの靈柩は傭職工に依つて州金庫の地下墳墓へ運ばれることゝなつたが、故人の崇拜者たる後の市長カール・シュワーベとハキンリッヒ・フォッスとの盡力によ

つて故人の年若き愛慕者二十名に依つて墓地へ見送られることを許された。深夜此等の若き人々が靈柩を運び出さんとする時、内から獻歌の聲が洩れ外には叢に鶯の音が聞えた。月明の沈默せる市街を通つて葬列は徐ろに進んだ。途中キルヘルム・フォン・フムボルトも之に加はつた。斯くてヤーコフ寺の州金庫の地下墳墓にと詩人シルレルは葬られた。シュワーベは『何等の弔歌も、何等詩人を記念する言葉も深夜の沈默を破らなかつた』と傳へてゐる。

翌日午後ヤーコフ寺で哀悼式が行はれた。堂内は參會者を入れるの餘地を見ないまでに滿された監督フォークトは弔辭を述べ、モツアートの哀曲が式を閉ぢた。ゲーテは病蓐中にあつて參會するを得なかつた。彼は『彼の生存の半ばを失つた』と歎いた。

千七百八十八年に一度此地下窖は清掃されたけれども、それから後シルレルまで三十二回の埋葬が行はれ、其後千八百二十六年に再び清掃されて閉鎖さるゝまで更に十一回の埋葬が行はれたので空間の狹隘——地下窖は長さ三米突十吋、幅二米突五十吋、深さ二米突八十吋しかなかつた——の爲に地下窖の人夫は棺や柩を相重疊せしめたので或は破壞し或は糜爛して遺骸の混亂を來した。市長シュワーベの盡力に依つて詩人の頭蓋は發見せられ、此年九月十七日に盛大なる擧式の下に大公圖書館に移され、ダンネッケンの手に依つて詩人の胸像は初めて完成された。詩人の息エルンストが其式に參列し、ゲーテの息アウグストは父に代つて式辭を述べた。次でゲーテの斡旋によつてイエナから專門家を聘してシルレルの遺骨は遺憾なく拾ひ集められ、翌年十二月十六日あの宏壯なる大公廟所へ盛儀の下に移葬されたのである。

シルレルの舊埋葬地を去つて堂宇の北側へ出る

と其處では壁上にゲーテの結婚式を司會した監督牧師ギュンテルの記念標、南側の壁間では獨逸中世紀の繪畫の巨壁ルーカスクラナハの浮彫（寫眞前出）を示した珍らしい記念標が私の注意を牽いた。それから少しく南に當つては童話詩人ムゾイスの記念碑が亦た眼に着いた。

ヤーコフ寺の境内を出でて振り返つて見ると、先程まで嬉遊してゐた子供は最早其處にゐよう筈がなく、鐘の音も沈默して仕舞ひ、塋域には全く隻影を見なかつた。只眞夏の日光が森閑とした御寺の瓦を射てゐる。

百數十年前の物靜かなワイマールの回顧とそれに伴ふ聯想から離れて、ゲーテの誕生日記念の說教をヘルデルの牧師をしてゐた御寺で聽いて、それからエルベデーレ公園の記念屋外劇を觀ようと北へ北へと足を運び乍ら現實の獨逸へ當面するとシュペングラーの『西歐の滅亡』が頻りに反駁され、上シレジヤの分割問題はハウプトマンを演壇に立たしめ、エルツベルゲルの暗殺は更に人心を激動してゐた。

朝鮮神敎源流考（六完）

李能和

二十二、高麗神敎

李能和曰。三國之時。新羅借唐之勢力。統合高句麗百濟爲一。而又繼新羅而起者。有甄萱之後百濟。弓裔之後高句麗。古山子大東地志。「後三韓」按新羅併麗濟而盡有三韓之地。及其季世。弓裔據句麗故地。而稱後高句麗。甄萱據百濟稱後百濟。復爲三國。未幾。高麗統一之故。號其功臣曰統合三韓功臣。○弓裔。新羅孝恭王二年。建都松岳。僭號稱後高句麗。八年改國號摩震。九年移都鐵圓。改國號泰封。改元水德萬歲。是皆因其民心。